

森林開発と薪不足の関係 — 鯖節づくりから考える森林の持続的利用 —

王 智弘 (東京大学大学院新領域創成科学研究科)

「不足」と「開発」の二つの言葉からは、一般的に何かの不足を開発によって補うことを連想させる。例えば食料の増産によって貧困を削減することや、あるいは訓練を施し職業的な技能を向上させることである。しかしながら、ある「不足」を解決するための手段である開発によって、新たな「不足」が引き起こされたとすれば問題である。

鯖節は1903(明治36)年には作られていた屋久島の特産品のひとつであり、現在は上屋久町の一湊集落を中心に製造が続けられている。鯖節作りには焙乾と呼ばれる魚体の乾燥と香りの生成の作業が必要であるが、この焙乾には現在でも島内の堅木(イス、カシなど)が薪として用いられている。本報告で取り上げるこの薪の不足は、先行研究の指摘

から1983(昭和58)年にはすでに現れている。それらの内容は、照葉樹林の減少や広葉樹薪の供給の不安定であり、価格についても1棚1万9千円の高値だと記されている。

1985(昭和60)年に、第五地域施業計画(昭和62年～昭和72年)樹立に係る地元意見として提出された資料から当時の状況を知ることができる。上屋久町の各地区の共用林組合長から上屋久営林署に提出された意見には、一湊、吉田の共用林組合から鯖節製造用の薪の供給が要望として記されている。この中の記述から一湊地区の薪炭供給林の状況を把握することができる(「薪炭材供給箇所を全般に亘り調査(中略)現在、残っている山は一湊手ノ宇都山2376、白川48林班の小班のみ」)。一方、吉田地区においては、53林班の収穫残について一部、伐採指定とすることで対処方針が立てられた。共有林野における共有林組合別、ヤクスギ造林面積を

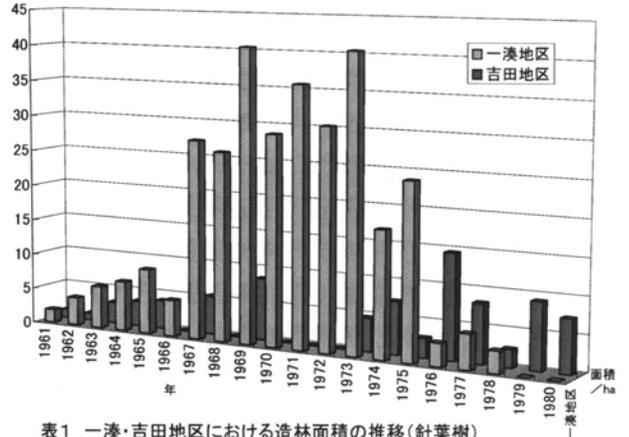


表1 一湊・吉田地区における造林面積の推移(針葉樹)

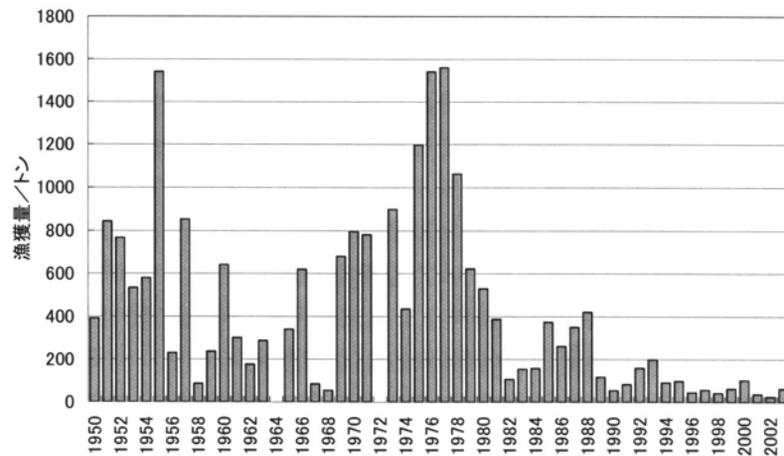


表2 上屋久町・さば漁獲量変化

大を続けていることが分かる。

一方で、さばの漁獲統計からは、造林拡大期と入れ替わるように好漁期が始まっていることを示している。このことが80年代に入ってから薪の不足にどのようなかわりをもつのかについてはさらに調査が必要である。